

患者・家族・市民の視点に立った情報提供

「健康情報棚プロジェクト」

石井保志

東京医科歯科大学附属図書館

I. はじめに

2005年6月に東京都立中央図書館に「闘病記文庫」が設置されました。大規模なテーマ配架が実現した背景を一例に、全国に患者・家族に真に役立つ情報提供を旨とする民間研究グループ「健康情報棚プロジェクト」の全容をご紹介します。

II. 健康情報棚プロジェクトの概要

「健康情報棚プロジェクト」は、患者・家族・市民の選択を尊重した健康・医療情報の提供を行うため、ピアカウンセリングに相当する医療資源（闘病記・患者会資料・診療ガイドライン等）を集約し、従来入手困難な健康情報のアクセス向上を目標としています。情報入手に際しての必要なスキル、障壁などを可能な限り低くし、図書館員などの情報専門家が支援することですべての人に関係する健康・医療情報に触れる機会を保障する。情報資料を探す労力より、読む方に労力を使ってもらうため、様々な健康・医療情報を疾患別等に分類し、一つの書棚で現物資料を直接手に取り、多くの選択肢から比較検討する環境整備を目標とする。そのためインターネットに代表される情報技術も大いに活用しながらも、患者会と市民を橋渡しする情報中継地点の役目を担う、既存の公共施設（公共図書館、保健医療施設など）に情報スポット（書棚）を設置し、効率的に健康情報を提供することがプロジェクトの目的です。

III. 「闘病記」は医療資源か否か

「健康情報棚プロジェクト」では、闘病記を「患者の心を癒すのは同じ病気の患者さんの実体験である闘病記を読むこと」という視点に着目しました。闘病記は、患者本人が書いたもの、家族が書いたもの、医師・看護師が書いたものと各種あり、いわゆる医療者の立場ではなく、「患者からの症例報告」とみることができます。

闘病記は入手が困難な資料であり、少部数発行のものが多く、書店の棚に長く置かれる機会は少ない。また抽象的な書名や副題が多く、本文に目を通さなければ正確な病名を探すことは難しい。図書館の分類・配架は、医学やノンフィクション、文学など多くのカテゴリーに分けられ闘病記というテーマで収集提供されていない。このようなことを克服し、闘病記を必要な人に届くようにすることで、先輩同病者の苦痛、不安、QOL向上などを知ることができる医療社会資源と位置づけています。東京都立中央図書館の「闘病記文庫」は、その実証実験ですが、健康情報棚プロジェクトにとって「闘病記」は、エピソードIであり、続いて「患者会資料」、「介護記」等を必要な人に届ける活動をします。